

礼拝のしおり (2022年2月号)

～主の御前に一つにされて～

天が地を高く超えているように
わたしの道は、あなたたちの道を
わたしの思いは
あなたたちの思いを、高く超えている。
(イザヤ書 55 章 9 節)



園庭がうっすらと雪化粧しました。

主の聖名を讃美いたします。新型コロナウイルスの第6波は、私たちの思いを超える大きなものとなりました。東京都における新規感染者数は前週から減少に転じているようですが、この第6波がいつ収まるのか、まだ確たる情報は流れていないように思います。

新型コロナウイルスのパンデミックが起こってから2年が経ちます。まだその終わりが見えているとは言い難い状況ですが、世界全体でのワクチン接種率がある基準に到達するならば、今年の半ばには、パンデミックの急性期は収束する可能性があるとも言われているようです。そうであってほしいと心から願いますが、仮にそのようになり、パンデミックが生じる以前にかなり近い生活が戻ってきたと仮定した時に、ふとすることがあります。2年以上にわたるパンデミックの日々を、私たちはどのように位置づけて、将来へと向かっていくことができるだろうか。漠然とではありますが、そのような思いを抱くのです。

旧約聖書のイザヤ書において、その第40章から第55章までは、預言者イザヤの語った言葉を受け継いだ第二イザヤという預言者が、バビロン捕囚という、神の民にとっては大きな危機の時代の後期に語った言葉であると言われていています。バビロン捕囚とは、新バビロニア帝国という外国の侵略によって、南ユダ王国が滅ぼされ、王国の主だった人々が外国へと連れて行かれてしまった出来事です。第二イザヤは、その捕囚の地で活動した無名の預言者でした。やがて捕囚の時が終わり、解放と帰還の時が訪れることを神の民に語ったのでした。

長い捕囚の時代を経験した神の民は、第二イザヤの語る神の御言葉を確かな望みの思いをもって受け止めた訳ではありませんでした。神の民にとっては、第二イザヤを通して語り掛けられたことが、目の前に見ていたものと大きく違うように思えてならなかったからでしょう。しかし、第二イザヤを通して語られる主なる神は、ご自身の思いと、見ておられる道は、あなたがたが抱いている思い、見ている道と異なると言われます。天が地を高く超えているように、わたしの思いと道は、あなたたちの思いとその道を超えているものだ、と言われるのです。続いて、神が言われたことは、こういうことです。「雨も雪も、ひとたび天から降ればむなしく天に戻ることはない。それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ、種蒔く人には種を与え、食べる人には糧を与える」(イザヤ書 55 章 10 節)。

聖書の大地における気候とは全く違いますが、私たちが生きる日本でも雪が降ります。2月には、東京でも雪が降ることとなりました。もちろん、雪国と呼ばれる雪の多い地域の比ではありません。雪の多い地域では、冬の時期、その除雪作業にどれほど大きな時間と労力が費やされることでしょうか。雪国の教会の牧師と信徒の方々の苦労をいつも思うのです。

しかし、雪によって私たちの生活にさまざまな支障が出ることがあったとしても、山々に残る雪がやがて解けて流れ出し、大地を潤し、もたらされる実りがやはりあるのだと思います。私たちの抱く思いを超えた自然の営み、いや神さまが創造された世界の営みがあることを思うのです。

2年以上にわたって続く今回のパンデミックにどのような意味があるのか、やがて明らかになる時があるのでしょうか。それは分かりません。しかし、「そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も、むなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす」(イザヤ書 55 章 11 節)とお語りになる神さまの御言葉を信じ、信頼して歩むところにこそ、私たちが向かうべき将来があることを、しっかりと心に留めて歩み続けたいと願っています。

◎2月20日～3月13日の主日礼拝の予定

礼拝の予定	聖書・説教題	交読文	讃美歌 21
2月20日(日)	ゼカリヤ書 8章13～23節 マタイによる福音書 24章15～31節 「大きな苦難の日にも」	詩編 71編	14, 300, 157, 28
2月27日(日)	イザヤ書 45章20～25節 マタイによる福音書 24章32～51節 「滅びることなき言葉」	詩編 27編	6, 58, 474, 29
3月6日(日)	詩編 24編 1～10節 マタイによる福音書 25章1～13節 「主をお迎えする用意」	詩編 63編	18, 230, 475, 26
3月13日(日)	イザヤ書 43章1～7節 マタイによる福音書 25章14～30節 「神の賜物を無にすることなく」	詩編 23編	8, 564, 512, 27

☆2月20日～3月13日の主日礼拝、その他について（お読みください）

新型コロナウイルスの感染防止を考慮して、2月20日以降の高井戸教会の主日礼拝等について、以下にご案内いたします。ただし、感染状況が変わり次第、以下と違う対応になる可能性もあります。その点をご了承ください。なお、変更する場合は、高井戸教会の週報やホームページでお伝えするようにいたします。

◎主日礼拝について

主日の礼拝については、毎週日曜日、第一礼拝（午前9時30分開始）と第二礼拝（午前11時開始）という2回の礼拝を行う形を継続しています。ただし、先月から新型コロナウイルスの感染が急速に拡大したため、当面の間、主日における礼拝堂での礼拝は、牧師と近隣の長老、礼拝で役割を担う教会員のみで捧げることとし、それ以外のみなさまにはご自宅で礼拝をお捧げくださるようお願いしています。

毎主日の第二礼拝のライブ配信（礼拝の生中継）は続けて行っていますので、ご自宅において動画を視聴しながら礼拝を捧げることができます。ライブ配信を視聴したい方は、高井戸教会までご連絡ください（TEL 03-3333-2465）。

なお、礼拝説教の動画のアップロード、『礼拝のしおり』の発行も続けています。どうぞご利用ください。

◎子どもの教会について

感染拡大の状況を踏まえ、幼小科・中高科ともに、1月30日より2月27日まで中止することとしました。3月以降については、感染の状況を踏まえて判断いたします。再開にあたっては、高井戸教会のホームページ等でお知らせいたします。

◎オンライン祈禱会について

Zoomというアプリを用いてのオンライン祈禱会を、毎月1回（第1日曜日の午後5時より）行っています。

今現在、礼拝のライブ配信ならびに説教動画のメールを毎週受け取っておられる方は、開催日の前日までに案内のメールをお送りしますが、それ以外の方で参加を希望される方は、七條牧師までご連絡ください。また、「オンライン祈禱会」と称していますが、高井戸教会にいらしての参加も可能です。互いに距離を保ち、換気をした部屋で、マスクを着けた形で参加していただきます。準備の関係上、教会にいらっしゃる方は事前に七條牧師までご連絡ください。

「神の力に生かされて」（マタイによる福音書 22 章 23～33 節） 牧師 七條真明

マタイによる福音書第 22 章 23 節以下には、一つの問いを携えて、主イエスのもとにやってきた人々が出てきます。その問いとは、私たち人間の人生の終わり、地上を歩む日々の終わりのその先に待っているもの、それがどのような世界であるのかという問い、一つの言い方をすれば、死後の世界についての問いでありました。そして、死後の世界を巡る一つの問いを携えて主イエスのもとにやってきたのは、当時のユダヤの人々の中で、ある力を持っていたと考えられるサドカイ派と呼ばれる人々でありました。

サドカイ派の人々の信仰における特徴の一つは、死者の復活、死後の命というものを明確に否定する考えを持っていたということでした。確かに、旧約聖書の中で、復活というような考えが至るところに出て来るというようなことはありません。むしろ、死後の命、復活というようなことは考えない、それが旧約聖書の基本的な考えだと言えるように思います。特に、サドカイ派の人々は、旧約聖書の中で、最初の五つの書物、創世記から申命記までのモーセ五書と呼ばれる五つの文書を重んじ、モーセ五書の中に死者の復活などという考えはない、だから復活なんてないのだ、と復活を明確に否定する考えを示していたのです。

そのようなサドカイ派の人々が、主イエスに一つの問いを投げかけました。それは、彼らが重んじるモーセ五書の一つ、申命記の中にある御言葉を引き合いに出しての質問でした。

「先生、モーセは言っています。『ある人が子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と」。そして、彼らは、その申命記第 25 章 5 節の御言葉をもとに、次のような事例を上げてみせます。七人の兄弟がいて、長男が妻を迎える。しかし、長男は子が生まれないうちに死んでしまう。それで、次男が兄嫁と結婚する。けれども次男も子が生まれないうちに死んでしまう。三男以下、次々に兄嫁と結婚するのですが、同じように子が生まれないうちに死んで、最後には、その妻もそのまま死んだ。そういう事例です。随分設定に無理がある話のように思われますが、サドカイ派の人々は、この話を主イエスに語り聞かせた上で、こう質問します。「すると復活の時、その女は七人のうちのだれの妻になるのでしょうか。皆その女を妻にしたのです」。

もし死者の復活というものがあるとすれば、現世と呼ぶべき、生きた人間の世界の中で、こういう複雑な人間関係が生まれた場合、復活後の人間関係はどうなるのだ。分からないだろう。答えられないだろう。だから、復活などないんだ。サドカイ派の人々は、問いに対する真実な答えが知りたいというのではなく、主イエスを困らせる目的で、あるいは自分たちの主張を主イエスにも認めさせようとする目的で、主イエスに問いを投げかけたのでした。

しかし、主イエスは、サドカイ派の人たちの問いに困られることなく、それに答えてこう言われました。「復活の時には、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ」。主イエスは言われます。この世では、めとったり嫁いだりする。しかし、新しい世界で、死者の中から復活する者たちにおいて、この世における関係がそのまま保たれるような形にはならない。その者たちは、もはや死ぬことがない、つまり、永遠の命を持ち、神のもとにある御使いのような存在になるのだ、と。

ただそこで、主イエスが、サドカイ派の人たちに対して、こういう言葉をまず口にされて、答え始められたことを忘れる訳にはいきません。「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、思い違いをしている」。サドカイ派の人々は、自分たちなりに聖書をよく知っていると思っていたでしょう。けれども、彼らは、死んだ後のことを、この世の人間の関係、この世における目に見える現実の延長線上で考えていました。主イエスは、言われるのです。あなたがたは聖書を知ってはいない。神の御力を知ってはいない。だから、愚かな思いに囚われ、妄想を膨らませているだけだ、と。

主イエス・キリストを信じて教会に生きる私たちにおいては、どうでしょうか。信仰のこと、聖書のこと、なんとなく、それなりにもう分かっているような思いで生きている。しかし、実際は、聖書のこと、そして神の力がどれほど大きなものであるかを知らないままで生きている。だから、思い違いをして、彷徨っている。私たちも、どれほど繰り返し、そのように生きているだろうかと思わされるのです。

主イエスは、サドカイ派の人々に言われました。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神であられる御方、生きておられる神さまが、「わたしはあなたの神」と言ってくださる御方として、私たちに御顔を向けていてくださる。神が私たちの将来を知っていてくださる。聖書を通して神を新しく知る者とされ、その神の御力にこそ委ねて生きることができるよう、主イエスが招いていてくださるのです。